結婚の召命

人生とはすべて召命、初めての召命は出生の日。
脈々と受け継がれた祖先の一人でも違えば、私の誕生はない。
不思議なこと。長じて…

“結婚適齢期”という言葉がまかり通っていた時代、そのことは 21，22 歳を指していた。その時、私は 25 歳。周りが心配し、「見合い」。四か月後、結婚。これが二人への召命だったのだ、と気づいたのは後の話。それから、50 有余年。

式の前日、カトリック信者の私のために、教会にて二人だけで司祭から祝福をしていただいた。今、私は思う。あの時、夫は神の御手に包まれたのだ、と。結婚の召命をいただき、30 年目に受洗。二人ともに秘跡をいただけた。

結婚の召命、深く意識せず過ごしてきたが、いただいた伴侶は、決して偶然ではない。神の計らいによるものだった。神にいただいた、そう思う。召命は人それぞれ。一人でいることも召命。すべて召命。それをどう生きるか。

結婚の最大の召命はマリア様のもの。天の父からの召命を受け入れ、「御心のままになりますように」と。マリア様に倣い、一日一日を神とともに歩いていく。

そうなれますように。

（信徒）

召命を生きる喜びについて

両親が私を産み育ててくれたので、健康な身体と恵まれた生活があります。

両親が私に洗礼を授けてくれたので（その後も教会に連れて行ってくれたので）、神様を近くに感じ、霊的な支えにも恵まれています。どちらも私に「命」を与えてくれていますが、その全ては神様の御手の中で行われたのであり、そう信じたいものです。
このように信じる心や、命の与え主に対する感謝の気持ちは常に心に留められるものではなく、しばしば忘れてしまい、ともすれば今の生活は当たり前であるという傲りさえもってしまいます。

召命、すなわち神様から与えられた「命」について思う時、父なる神様の御前で私が感謝を表すことができているか、立ち止まって考えたいと思います。

日曜日には感謝の祭儀を祝い、種々の祈りによって主を賛美し、そして何より、神様の呼びかけに対して「はい」と答え、聖霊の導きに全てを委ねることに尽きるのではないでしょうか。神様からの呼びかけとは、多くの場合、司祭・修道者、結婚あるいは職業への呼びかけのことを意味するでしょう。もちろん重要なことです。

しかし、普段の生活で、例えば周囲の人々と“ともに”歩むこと（皆一つになることはとても難しいとことだと感じることがあります）、被災者のために祈り助け合うこと、その日頃の小さな行いも、一つ一つが神様からの呼びかけであると最近は感じています。

私たち全人類の母であり召命の保護者であるマリア様を模範としながら、生きていけますように。これからも感謝を忘れずに歩めますように。まだ未熟で弱い私に与えてくださる召命が、いつか心底からの喜びとなればと願っています。

（学生）

（修道者）召命の喜び

共同体で祈る静かな時間、整理整頓され掃除の行き届いた空間、心を込めて準備された素朴な食事、規則正しい時間割、忠実に繰り返される日課、主に呼ばれてともに生活するメンバーとの特殊な人間関係…。修道生活に霊的喜びの要素はいくつもある。

そのような中で、改めてわたしの喜びとは何だろうか。思い浮かぶのは、何年も修道生活を送っているのに、いまだにコントロールの難しい自分の惨めな癖、繰り返す弱さ、矯正をあきらめたくなる欠点の数々にも関わらず、そんな小さなわたしを何度でもゆるし、弱いままのわたしを担い、回心を気長に待ち望み、何かと愛情をかけようとあらゆる恵みを送ってくださるイエスさまのいつくしみ深さである。

一体なぜこんなにも愛されているのだろうか。周りの人を狭い自分の価値観だけで判断してしまったり、人と関われば避けられない摩擦にいちいち振り回されてしまったり、無償であるはずの奉仕にどこかで見返りを求めている卑しいわたし。ところがどういうわけか、わたしはイエスさまに見放されるどころか、むしろとても理不尽に愛されてしまっているような気がするのだ。

わたしの召命の喜びには、主の愛に応えられない自分という苦々しさと申し訳なさ、それでも愛され恵みを注がれていることへの戸惑いとありがたさ、そしてその大きすぎる愛への深い憧れがとても複雑に入り混じっているように思う。

修道院の片隅で、平和への祈りを込めて捧げる一つの平凡な行いを、今日も大きな大きな主の愛の恵みに支えられて、罪びとであるわたしの不器用な愛で、喜んで捧げていけますように。そう願い、奮闘していきたい。

（修道者）

召命を感じる時

私はこれまで、「召命」という言葉をどこか難しく捉えており、司祭やシスターになることだけが召命なのだと考えていました。

しかし先日、「神の愛の宣教者会」のシスターのお手伝いで、足の不自由な方々の散髪をさせていただいた際、大きな気づきがありました。奉仕を終えた帰り道、シスターが、「あなたはイエス様の髪を切られたのですよ」とおっしゃったのです。その言葉に触れたとき、「これこそが召命なのだ」と胸が熱くなりました。

イエス様のみ心に適う行いをするとき、私たちの心には深い喜びと穏やかな平穏が与えられます。特別な立場に就くことだけではなく、与えられたそれぞれの役割の中で主の招きに応えていくことの大切さを学びました。

私たちがいつも主のみ心を行い、そのことで生きる喜びを感じられるとすばらしいと思います。

（青年）

「司祭召命について」

司祭召命、それは、神が自らの司祭職に召し出してくださる命であり、何より恵みそのものである。そして、それは、人間に与えられるものであっても、神ご自身のものである。

しかし、それを与えられた人間は、はじめから自分のものであったかのように錯覚し、召命が恵みであること、神のものであることを忘れてしまう。そのサインは、日々、口をついて出てくる不平と不満であり、何より感謝を忘れていることである。

「あなたのうちに、よいわざを始めてくださった神ご自身が、それを完成してくださいますように」。

これは、叙階式の時、司式司教が受階者に対して言う言葉である。受階者の決意表明（叙階される者の約束）」の締めくくりとして言われ、その後、式は連願に入っていく。叙階式のこの場面には、召命が神のものであり、それに応えるのが人間であり、しかも、そのプロセス全体は、神の御手にあるということがはっきりと表れている。

召命の創始者、完成者は神ご自身であることを、ひと時も忘れないようにしたい。

（司祭）